活　動　報　告

共同研究グループ活動報告（2018 年度）……136
講演会要旨 ……146
購入文献解題 ……149
所員自著紹介 ……150

共同研究グループ活動報告（2018 年度）

日中関係史

本年度は合計 5 回の例会を開催し，2018 年 5 月には中国・江蘇師範大学で開催された国際シンポジウムに共同研究のメンバーが参加し，報告を行った。また，人文学研究所・2018 年度叢書の刊行に採択され，現在，論文集『中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」』（仮題）の刊行に向けた準備を進めている（A5 判・上製・カバー装，2019 年 3 月予定，東方書店）。以下，本年度に開催された研究会の活動を箇条書きで記す。

⑴　第 60 回例会「戦後華僑・留学生を語る」の開催

日　時：2018 年 5 月 26 日（土）
場　所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室
共　催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
内　容：◎「戦後華僑・留学生を語る」（陳学全さん，江洋龍さん，コメント符順和さん）
◎「5 月 18 日～21 日　江蘇師範大学のシンポジウム報告」（見城悌治，孫安石）
◎ 2018 年の年間計画の打ち合わせ

⑵　第 61 回例会の開催

日　時：2018 年 7 月 21 日（土）
場　所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室
共　催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
内　容：◎「中国人留学生の研究と社会学のデータ分析」李敏氏（信州大学）
◎「早稲田大学における南洋公学の中国人留日学生』鄭海洋（西安交通大学日本校友会）
◎「5 月 18 日～21 日　江蘇師範大学のシンポジウム報告」（胡穎，中村みどり）

⑶　第 62 回例会「論文集・予備報告会」の開催

日　時：2018 年 9 月 22 日（土）
場　所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室
共　催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
内　容：◎「清末における留日学生の同郷会について」胡穎（神奈川大学非常勤講師）
◎「華北政務委員会と中国人留学生」池田健雄（千葉大学特別研究員）
◎「『訳書彙編』と清末の中国人留学生の雑誌出版」郭夢垚（神奈川大学大学院修士課程）

◎「清国留学生会館研究初探」孫安石（神奈川大学）

⑷　第 63 回例会「論文集・予備報告会」の開催

日　時：2018 年 10 月 27 日（土）
場　所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室
共　催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
内　容：◎「余計者としての留日学生 ── 張資平『一班冗員的生活』」林麗婷（同志社大学助手）
◎「日記から読み取る清末留学生の日常生活」欒殿武（武蔵野大学）
◎「満州国留日学生会の活動について」見城悌治（千葉大学）
◎「中華学芸社の機関誌『学芸』（1917–1937）について」潘吉玲（早稲田大学，博士課程）
◎「清末中国人日本留学の政策と郭開文の日本留学」劉建雲（日本大学，非常勤）

⑸　第 64 回例会「論文集・予備報告会」の開催

日　時：2018 年 11 月 10 日（土）
場　所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室
共　催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
内　容：◎「『対支文化事業』における特別講習会」三村達也（千葉大学，特別研究員）
◎「満洲国日本留学生統計資料に関する研究」李思斉（一橋大学，博士課程）
◎「1950 年代の中国留日同学会と華僑社会」大里浩秋（神奈川大学，名誉教授）
◎「詩と愛国 ── 留米の聞一多と留日の穆木天」鄧捷（関東学院大学，教授）

（文責　孫安石）

色彩と文化Ⅳ

「言語景観」を「外国語教育」に応用できる理論的枠組みを模索しつつ言語ごとに調査活動を行なっている。

⑴　研究会の開催：
日　時：7 月 23 日（月）　16：30～18：00
発表者 1：鈴木幸子（本学国際文化交流学科教員）
テーマ：「日本の観光地の言語景観と英語教育への活用
：緊急事態の対応―危険を知らせる
発表者 2：佐藤裕美（本学英語英文学科教員）
テーマ：「オバート（タスマニア）の言語景観と英語教育への活用 ── 固有の歴史，多文化を背景にした英語と世界語としての英語」

⑵　海外調査

佐藤裕美は，2019 年 2 月 16 日からイタリアのパドヴァに出張を予定している。出張では，イタリア語の文法性の一致現象とジェンダーの多様性に関して，イタリアでの公文書での対応の試みについて調査を計画中である。言語景観については，ベネチアとその周辺の街中の標識で，ベネト方言での表記，標準イタリア語での表記の分布や傾向について資料収集するつもりである

鈴木幸子は，2019 年 3 月 10 日からカナダのヴァンクーバーとヴィクトリアに出張を予定している。前回の発表で扱ったトピック「防災」を中心に観光地で見られるサインの調査をする計画である。カナダはフランス語と英語が公用語なので二言語は当然として，移民の国でもあるため，多言語での案内について，観光政策の中での扱いがどうなっているのかも視野に入れて研究するつもりである。

尹亭仁は，2018 年 8 月 19 日～22 日の 4 日間北京に滞在し，共同研究者の北京電通の林福子さんと北京空港・北京駅・王府井・北京イトーヨーカドー・地下鉄の表示を中心に調査を行なった。この調査の結果は「漢字文化圏―東京・ソウル・北京における言語景観の比較」（仮称）のタイトルで投稿する予定である。

さらに，2019 年 3 月 12 日～18 日の 7 日間，ロンドンでの調査を計画している。2014 年に発表したニューヨークでの言語景観との比較に加え，ロンドンにおける日本語，韓国語，中国語などの東アジア言語を中心とした多言語表示にも目を向け，アジアでの現状との比較を試みるつもりである。

2019 年度より調査の結果を研究会で発表するだけでなく，論文として発信するなど，共同研究を本格化していく計画である。

（文責　尹亭仁）

言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に日本語と中国語を比較する視点から，社会言語学に関連する総合的な研究を行ってきた。論文の執筆は，歴史的言語景観に関するものと異文化語用論のテーマに関するものを中心に行った。
2. 今年度の主な研究成果：
   「日中命題モダリティの異文化語用論の探究 ── 「過剰含意」発生のメカニズム」『社会言語科学』Vol. 21-No. 2 日本社会言語科学会　2018 年 9 月 p 52-63
3. 今年度主な研究所所蔵資料の収集：
   『大満洲国風景』大正写真工芸所 昭和 9 年
   『上海大観』八千洋行　昭和 6 年
   『明画全集』浙江大学　2017 年
4. 2019 年度も引き続き歴史言語景観と異文化語用論について研究調査を実施する予定である。

（文責　彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
   ・第 1 回研究会（講演会）（昨年度の報告書に未記載のため）
   開催日：2018 年 3 月 30 日（金）
   会　場：17 号館 216 室
   発表者（所属）：古屋耕平（本学外国語学部英語英文学科）

演　題：「カウボーイと家庭と原子爆弾 ── 西部劇小説『シェーン』と核／家族の物語」

・第 2 回研究会（講演会）

開催日：2018 年 9 月 14 日（金）

会　場：17 号館 216 室

発表者（所属）：田村和彦（関西学院大学教授）

演　題：「ファシズムと男性性妄想 ── クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』を手掛かりに」

2. シンポジウムの開催　　なし

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『68 年の〈性〉』を 2015 年度に出版したが，その後に続く企画として，男性表象をテーマにした叢書の出版を目指して発表を組織してきた。今年度については第 1 回研究会では，研究グループメンバーの古屋耕平先生に「カウボーイと家庭と原子爆弾 ── 西部劇小説『シェーン』と核／家族の物語」という演題で発表していただいた。西部劇映画でとりわけ有名な『シェーン』について，小説テキストを掘り下げ，第二次世界大戦や冷戦期のアメリカについての言及，とりわけ主人公の男性表象を〈家庭〉神話との関係から読み解く試みであった。戦争や原爆という暴力の発露の後で，それをどのように正当化し，受け入れるか，という問いが隠されたこの作品が，日本をはじめさまざまな翻案を生んだという点は，アメリカと男性性の伝播という意味でも重要なことであった。

また第 2 回研究会では，関西学院大学教授の田村和彦先生を招いて，「ファシズムと男性性妄想―クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』を手掛かりに」（2018 年 9 月 14 日）というタイトルで講演を行った。テーヴェライトはその著作で，第一次大戦直後に結成された国家の体裁を守るための義勇軍と，その後国防軍に吸収され，やがてナチス党政権での SS として復活する軍部の流れを，どこか中性的な政治文脈で語るのではなく，「兵士的男性」，すなわち男たちの物語として語り直している。その際，中心的な概念として浮かび挙がるのが，武装した男たちの「肉体の甲冑」，そして彼らが身につける拳銃，大砲，戦闘機といった「延長された身体」イメージと，対してその肉体の甲冑で必死に食い止める，どろどろのもの，流れるもの，洪水としての女たち，あるいはおぞましい同性愛者，民族，プロレタリアート，群衆といったイメージである。テーヴェライトは，その個体的，あるいは集団的なイメージこそが「男性性妄想」であり，その本質が暴力と常に一体化していることにおいてファシズムの温床であると説く。テーヴェライトのこうしたアプローチ自体は，テーヴェライト自身が個人史を並置することで示しているように，ナチス世代でもある親世代への糾弾といった，ドイツにおける 68 年世代に典型とされる文脈にありながらも，昨今ますます注目される社会学的な分析をメインとした男性学とは異なる，より心理学的で，表象的な分析による男性学の在り方として，忘れてはならない重要な考察であると感じられた。本講演会には，学外からも多数の研究者が参加し，研究会は大いに盛り上がった。また，男性性を主題とする上でのヒントを多数得ることができた。

また，長く「〈身体〉とジェンダー」共同研究に携わってきた山口ヨシ子先生のご退職を記念した，『人文研究』第 196 号に，多くのメンバーが寄稿した。〈身体〉とジェンダー研究に関係するものが多く，来年度の叢書発行に向けた準備が着々と整いつつある。

（文責　熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：4 月 25 日（水）

会　場：17 号館 216 室
議　題：今年度の研究計画について
個別の研究報告はなく，今年度の研究打ち合わせを行った。発表の予定や講演者希望など。叢書の件（出版社の選定方法など）についても議論した。

第 2 回研究会
開催日：6 月 27 日（水）
会　場：17 号館 216 室
発表者：上原雅文
演　題：①共同研究奨励助成の総括「最終報告書」について
②叢書の書名，構成について

第 3 回研究会
開催日：8 月 1 日（水）
会　場：17 号館 216 室
発表者：上原雅文
演　題：世界史の中のさまざまな「神」をめぐって ── 叢書の構成との関係で ──

第 4 回研究会
開催日：11 月 28 日（水）
会　場：17 号館 216 室
発表者：小熊誠
演　題：風水と自然観 ── 中国江西省贛南地区の村落調査から ──

第 5 回研究会
開催日：1 月 23 日（水）
会　場：17 号館 216 室
発表者：太田原潤（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科修士課程，元・青森県埋蔵文化財調査センター副参事）
演　題：文字の暦と非文字のコヨミ ── 自然観を背景としたコヨミをめぐって ──

2. シンポジウムの開催　　なし

3. 活動内容

今年度はまず，2018 年度末刊行予定の叢書について（出版社，目次などの構成，論文相互の内容連関）時間をかけて議論した。原稿締切が 9 月末となったため，前期では個別の研究報告としての研究会は少なめにした。

7 月 13 日に，共同研究奨励助成の成果発表会で 3 年間の総括的な報告を行った。後に届いた評価書ではおおむね好評価であったが，コメントの中に，年度末刊行の叢書（共同研究奨励助成の報告）において，共同研究としての成果であるための，論文相互の関係についての記述を求めるものがあった。叢書に反映させたい。

（文責　上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り，その根源を考察することで，身体が持つ機能的な意義を検討した。

Ⅰ．関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点に関する論文「A Multi-modality Approach Towards Elu-

cidation of the Mechanism for Human Achilles Tendon Bending During Passive Ankle Rotation.」が Scientific Reports 誌に掲載された。

また，アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in limb displacement from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, calcaneus」を執筆し，投稿した。

Ⅱ．ランニング時の足着地法の違いがアキレス腱長や筋束長に及ぼす影響に関する論文「Forefoot running shorter gastrocnemius fascicle length than rearfoot running」を執筆し，投稿した。

Ⅲ．以下の研究セミナーを開催した。

・「超音波診断装置の研究開発」三竹毅氏（（株）Lily MedTech 取締役），5 月 25 日

・「詳細な 3 次元計測に基づいたヒト足部の歩行機能解明」伊藤幸太氏（慶應義塾大学理工学部機械工学科助教），10 月 30 日

・「サッカーと実行機能の関係性 ── 海外におけるサッカーに着目して ──」酒本勝太氏（長友佑都フットボールアカデミーコーチ／ジェフユナイテッド千葉エリートプログラムコーチ／神奈川大学非常勤講師），1 月 17 日

（文責　衣笠竜太）

NCH 新聞研究会

1. 研究内容：本研究会は，神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞（ONLINE 版）の日本，中国，韓国，東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。
2. 活動内容：研究会の構成員が『良友』画報研究会 http://liangyou.jugem.jp/，中国人留学生史研究会 http://chineseovers.jugem.jp/ と重複するため研究会単独での活動は活発ではなく，一部のメンバーが 2018 年 11 月に上海で開催された「円卓会議－中国・上海都市研究の新動向」に参加するのみであった。来年にはより活発な活動を展開したい。詳細は http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/ をご参照ください。

「円卓会議 ── 中国・上海都市研究の新動向」

日　時：2018 年 11 月 9 日（金）・10 日（土）

場　所：中国・上海社会科学院

共　催：神奈川大学非文字資料研究センター・上海社会科学院歴史研究所

《プログラム》

【開会挨拶】小熊誠（神奈川大学非文字資料研究センター長）

熊月之（上海社会科学院歴史研究所元所長）

【報告】（一部，神奈川大学関係者のみ）

（1）『良友』画報ースポーツと KODAK，そして Shanghai Municipal Council 英文資料について　孫安石（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

（2）上海文化と香港・華僑　村井寛志（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

（3）『良友』画報と百貨店　菊池敏夫（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）

（4）都市上海の中の創造社作家たち　中村みどり（元神奈川大学教員）

（5）上海の黄浦江と哈爾浜の松花江の内河航行権について　李美大一（神奈川大学外国語学研究科博士後期課程）

（文責　孫安石）

声の文化

今年度は下記のとおり，外部講師による講演会と，共同研究グループのメンバーによる研究会を実施した。

日　時：2018 年 7 月 6 日（金）18：00～19：30
場　所：3 号館 401 室
講演者：兵藤裕己（学習院大学文学部教授）
タイトル：物語テクストの政治学

日　時：2018 年 12 月 19 日（水）18：00-19：30
場　所：20 号館 417A 室
報告者：深澤徹（神奈川大学外国語学部教授）
タイトル：「憑依する〈からだ〉を演戯する ── 世阿弥『風姿花伝』を読む ── 」

来年度は前期と後期に研究会を実施する予定である。

（文責　村井まや子）

日韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を当面の課題として掲げ，研究活動をすすめている

⑴　研究会の開催

日　時：12 月 10 日（月）17：00～19：00
発表者 1：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）
テーマ：「日本語を母語とする韓国語学習者の誤用にみる諸相 ── テンス・アスペクトを中心に」
発表者 2：尹聖楽（武蔵野学院大学非常勤講師・東京大学大学院博士課程・本学 2011 年度慶南大学交換留学生）
テーマ：「事実条件を表す「たら」と「- 었더니」の対照分析」

年 2 回以上の研究会を計画しており，来年度は日本語を軸に対照言語研究の観点から中国語やスペイン語のテンス・アスペクトの研究者にも参加を呼びかける予定である。また海外で対照研究を行なっている研究者との意見交換，共同研究・共同執筆もすすめる計画である。

（文責　尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第 1 回研究会（講演会）
開催日：2018 年 7 月 13 日
会　場：17 号館 216 室
発表者：岡部杏子氏（神奈川大学非常勤講師）
演　題：女性が詩を書くこと

19 世紀フランスの詩人マルスリーヌ = デボルド・ヴァルモールを中心に
第 2 回研究会（講演会）
開催日：2019 年 1 月 25 日
会　場：17 号館 216 室
講演者：貞廣真紀氏（明治学院大学文学部英文学科准教授）
演　題：大西洋を渡る知識人たち ── 世紀転換期における「文化」論争について

2. 活動内容

本研究グループは，活動 2 年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも，研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し，意見交換をしながら，領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は，2 回の講演会を開催し，ゲストを招いたご講演を頂いた上で，メンバー全員がそれぞれの専門の立場から質疑を行い，意見交換をして，お互いの知見を深めた。

（文責　松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし
シンポジウムの開催：なし
活動内容：

本研究グループは，人の知覚・認知の仕組みについて，研究することを目標としており，特に，知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は 3 人のメンバーの共同研究をより推進するために共同研究奨励助成「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を獲得し，知覚様相間に共通して生じる尤もらしさの感覚を生起するメカニズムの解明に着手した。

一方で，メンバーがそれぞれに目標に向かって以下の研究活動を行なった。その概要を述べる。

吉澤は，視覚情報と聴覚情報の統合機序について心理物理学実験を行った結果を報告した学術論文（Remijn, G.B., Yoshizawa, T. & Yano, H.（2018）Streaming, bouncing, and rotation: The polka dance stimulus., i-Perception, 9, 4, 1–4）を発表した。また，奥行知覚機序における高次視覚情報（陰影など）による低次視覚情報処理過程（両眼視差検出機序など）への修飾について心理物理学実験を行い，認知的情報が感覚的情報を修飾することを，国際会議（Fujiya, O., Yoshizawa, T., Kusano, T. & Saida, S. The influence of a shadow cognitively casted on surfaces on the depth perception in the stereopsis, Annual meeting of the Vision Science Society）において報告した。また，金色という知覚が基本色名としての機序を持つ知覚であるかを心理物理学的知見と ERP 計測結果をもとに検討したところ，脳神経科学的にも，心理学的にも金色は光沢のある黄色と処理されている可能性が明らかになったことを国際会議（Yoshizawa, T., Kojima, H., Matsumoto, T., Sato, M., & Uchikawa, K. ERP responses to the perception of glossiness of the basic colors, European Conference on Visual Perception, Trieste, Italy）において報告した。

前原は，輝度コントラスト刺激に対する弱視眼と健眼の視覚野の活性化を比較したところ，両者には有意差がないことを報告した学術論文（Thompson, B., Maehara, G., Goddard, E., Farivar, R., Mansouri, B. & Hess, R. F. Long Range Interocular Suppression in Adults with Strabismic Amblyopia: A Pilot fMRI Study. Vision），定型発達児群における斜め線の線分方位マッチングの成績と年齢との間の相関から，斜め線知覚の正確さは 10 代前半まで継続して発達する可能性を示唆した学術論文（隅田浩子，斎田真也，前原吾朗。読み書き困難児と定型発達児における oblique 効果。基礎心理学研究。），そして，光干

渉断層撮影を用いて撮像された網膜断層面は，健眼よりも弱視眼の方が厚いことを示した学術論文（Araki, S., Miki, A., Goto, k., Yamashita, T., Takizawa, G., Haruishi, K., Yoneda, T., Ieki, Y., Kiryu, J., Maehara, G., & Yaoeda, K.（2018）. Effect of amblyopia treatment on choroidal thickness in hypermetropic anisometropic amblyopia using swept-source optical coherence tomography. BMO Ophthalmology, 18: 227, 1-6.）を発表した。

松永は，昨年度に引き続き，音楽知覚能力の学習過程における文化的影響と発達的影響を実験的に検討し，日本人，中国人，ベトナム人，インドネシア人，米国人の間で調性知覚を比較した学術論文（Matsunaga, R., Yasuda, T., Johnson-Motoyama, M., Hartono, P., Yokosawa, K., & Abe, J.（2018）. A cross-cultural comparison of tonality perception in Japanese, Chinese, Vietnamese, Indonesian, and American listeners. Psychomusicology: Music, Mind, and Brain, 28, 178-188.）を発表し，日本人の二重音楽的能力が脳内でどのように表現され，また，その能力がどのように獲得されるのかを国際会議（Matsunaga, R.（2019）Bi-musically enculturated brains: About present-day Japanese listeners. The 21st Congress of Japan Human Brain Mapping Society. Symposium（invited）. March/15-16. Tokyo University）で報告し，人間の脳内音楽認知メカニズムについての基調講演（Matsunaga, R.（2018）Cognitive modeling of music perception. The 9th IEEE International Conference on Awareness Science and Technology & The 3rd International Five-Sense Symposium. September 19-21, 2018）を行い，人間の脳内音楽認知処理が初期の音楽聴取経験に伴って変化することを示した脳磁場測定実験の結果を国内学会（松永理恵・竹下悠哉・横澤宏一・阿部純一（2019）第二音楽（日本伝統音楽）を学習し始めた年齢がバイミュージカルな聞き手の脳内楽知覚処理に与える影響。第35回日本脳電磁図トポグラフィ研究）で報告し，日本の子どもが音楽スキーマを獲得していく過程と北米の子どものそれとを比較し，音楽スキーマ獲得過程における文化普遍的特性と文化特殊的特性の同定を試みた結果を国内学会（松永理恵・Pitoyo Hartono・横澤宏一・阿部純一（2018）。音階スキーマの発達過程における文化普遍的特性と文化固有的特性：欧米の子どもと日本の子どもの比較。日本音楽知覚認知学会平成30年度秋季研究発表会抄録原稿集，p. 14-15，龍谷大学）で発表した。また，当該分野において著書2冊を分担執筆した。

これらの研究成果をもとに今後，共同プロジェクトなどを通してグループの目標とする課題を解明する予定である。

（文責　吉澤達也）

学びの見える化研究会

⑴　研究会の趣旨

各自の研究テーマを持ち寄り，研究報告及び意見交換を行う。

専門職等の人材育成の見える化を行い，教育・学習のあり方や体系化を検討する。

⑵　各自の研究テーマ

①学内研究者

テーマ1：「潜在的ボランティアを活動に誘うため条件設定と環境づくり」
齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部・教授）

テーマ2：「学校体育におけるダンス授業の指導観の育成について」
太田早織（神奈川大学人間科学部・助教）

②学会研究者

テーマ3：「研究開発における効果的な暗黙知見える化手法の開発研究」
森和夫（株式会社技術・技能教育研究所・代表取締役）

テーマ 4：「若者の個人化・社会化支援及び第三の支援」
西村美東士（聖徳大学・元教授，東京都板橋区・社会教育指導員）

⑤参加メンバー

テーマ 5：「若年無業者に対する支援のあり方の検討」
新宅圭峰（認定特定非営利活動法人育て上げネット・役員）

テーマ 6：「乳幼児健康診査後の保健師における支援の在り方について」
大塚由絵（厚木市役所市民健康部健康づくり課・課長）

⑶　研究会の実施日

基本的に夏と春を除き，月に 2 回（土曜日）で全 20 回の実施予定。

4 月 28 日，5 月 12 日，5 月 26 日，6 月 16 日，6 月 30 日，7 月 7 日，7 月 14 日，9 月 1 日，9 月 15 日，10 月 13 日，10 月 20 日，11 月 10 日，11 月 17 日，12 月 15 日，1 月 12 日，（全 15 回）

（予定）1 月 26 日，2 月 9 日，2 月 23 日，3 月 2 日，3 月 9 日　（全 5 回）

（文責　齊藤ゆか）

講　演　会　要　旨

1. 演　題：「物語テクストの政治学」
講演者：兵藤裕己（学習院大学文学部教授）
開催日：7 月 6 日（金）18：00〜19：30
会　場：17 号館 216 室

共同研究グループ「声の文化」では，外部講師として『平家物語』研究の第一人者兵藤裕己氏をお招きし，語り物文芸の「声」について講演をお願いした。講演は詳細なレジュメとパワーポイントを用いて行われ，当初は社会的に恵まれない地位にあった盲目の琵琶法師による語り物文芸であったはずの『平家物語』が，テキストとして文字化されることで「正本」として権威化され，権力者の支配の道具となるばかりか，その権力を正統化し権威付ける文化資産にまで高められてしまう皮肉な過程を，歴史的に跡付けようとするものであった。文字以前の「声」と，それを「文字」化する行為との対立葛藤を通して，中世の語り物文芸を批判的に継受し，解明していこうとする講演者の研究姿勢を鮮やかに浮かび上がらせる講演内容であった。中世の語り物文芸だけでなく，兵藤氏には明治期の浪花節語りの「声」が，国民統合の具として利用され変容していく過程を論じた名著『「声」の国民国家―浪花節が創る近代日本』があり，その問題意識は，識字率 100% に近い現在にあっても無縁な問題ではないことが強調された。

当日の参加者は，共同研究グループのメンバーだけでなく，大学院生など 30 名ほどが集まり，講演後の質疑応答も積極的になされて，講演会は盛況のうちに終了した。

（文責　深澤徹）

2. 演　題：「女性が詩を書くこと　19 世紀フランスの詩人マルスリーヌ = デボルド・ヴァルモールを中心に」
講演者：岡部杏子（神奈川大学非常勤講師）
開催日：2018 年 7 月 13 日
会　場：17 号館 216 室

本学の共通教養科目「文学 I」「文学 II」で，女性表象をテーマにフランス文学を講じている岡部杏子先生を講師に招いて，19 世紀フランスの女性詩人マルスリーヌ = デボルド・ヴァルモールを題材に，文学創造とジェンダーの関係について考察した。

まず 19 世紀フランスにおける女性と文学の関係の概略の解説があった。スタール夫人やジョルジュ・サンドという有名な作家たちに対して，ブルーストッキングを意味する「ル・バ・ブル」と称された女性たちは，貧しさや不潔さ，部屋の乱雑さという言説によって語られることが多く，それは良妻賢母というイメージを壊し，家庭の秩序を乱す存在とみなされたことによることが示された。

次に，こうした文脈との関係から，詩人デボルト = ヴァルモールが紹介され，彼女の人生と作品をケーススタディとして，分析が行われた。恋愛・母性愛を歌い上げ，悲歌の名手といったイメージが先行するという点で，彼女の作品は当時のジェンダー規範から大きく逸脱することはなく，「ル・バ・ブル」の女性たちとは異なり，幅広く受け入れられたと論じられた。一方で，岡部氏は，政治・社会問題

を主題とした詩作品にも目を向ける。さらに実際に詩を読みつつ，政治的メッセージ性は低いが，息子を暴動で失った母の苦しみなど，女の嘆きにとどまるような点があったことも強調し，彼女の作品の可能性と限界を同時に示す，繊細な読解を行った。これは近現代文学の分析にも有用となる視点であり，近代文学を中心とする本研究グループの今後の展開にも資する内容であった。

発表の合間には，他の地域での文学における女性作家の地位との比較や，女優としてのキャリアと作品の関係などで質問があり，研究会は大きな盛り上がりを見せた。

（文責　熊谷謙介）

3. 演　題：明清の蘇州閶門と蘇州版画
講演者：大木康（東京大学東洋文化研究所教授）
開催日：2018 年 7 月 31 日
会　場：17 号館 216 室

本講演においては古都として名高い蘇州について蘇州版画に焦点を当てつつ論じられ，また美術作品としての側面に加えて，蘇州を社会的・文化的に読み解くツールとしての側面も蘇州版画が持つ点への指摘がなされた。

蘇州は春秋時代には既に整備され始めていた極めて歴史の古い都市であるが，とりわけ明清期には経済的な発展に伴って爛熟した文化が展開した空間でもある。背後に控える太湖，町の西側を行く京杭大運河と町の内外に縦横に張りめぐらされた運河，そして数多く造成された園林が織りなす景観は同時期の日本にも羨望をもって受容されるものであった。

講演においては，まず蘇州について古地図や文献資料を用いて蘇州城の閶門から山塘街に至る地理的状況について予備的な知識が提示されたのち，これらの地域を題材とした蘇州版画について解説が行われた。そこでは手彩色による鮮やかな色どりと西洋版画の影響を特徴としたこの版画が当時中国で販売されて広く受け入れられていただけではなく，日本にも渡って中華趣味を満たすものとして高い需要があった点についても言及がなされた。

以上の経緯を背景として蘇州版画は現在も日本各地に残されており，愛好家による収集も行われたが，そうしたコレクションの一つ海の見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵の蘇州版画を実見して得られた知見をもとに講演者は次の指摘も行った。まず，蘇州版画には上述の通り商品としての性格があり，とりわけ土産物としての側面は描かれた内容に影響を及ぼしている。賛に見える各地の名産品への言及や具体的な店名を伴った看板の存在は宣伝を意識したものと見なすことも可能である。また，三山館（福建商人による同郷・同業組織による建物）の描写から社会に向けた自身のアピールを図る福建商人と版元・作家とのつながりも想定されることから，蘇州版画が景観をありように写し取ったものではなく，経済的・社会的背景に基づいた版元・作家の意図が込められたものとも見なしうる。

以上のように講演者は蘇州版画の持つ美術品としての価値だけではなく，明清期の蘇州社会を読み解くための素材としても有用な資料であることが論じられ，参席者にとっては蘇州版画の持つ魅力を感じ取れる得難き機会となった。

（文責　中林広一）

4. 演　題：冬眠するクマはなぜ寝たきりにならないのか？
講演者：宮崎充功先生（北海道医療大学リハビリテーション科学部准教授）

開催日：2018 年 12 月 18 日
会　場：3 号館 B103 室

骨格筋は体重の約 4 割を占める最も大きな臓器である。骨格筋に定められた宿命は，”Use it or lose it” であると言われるように，使えば使うほど大きく（強く）なり，使わないと小さく（弱く）なっていく非常に可塑性に富んだ組織である。骨格筋は，身体を動かすパワーを発揮するだけではなく，エネルギー消費の場であり，体温調節の役割，タンパク質の貯蔵庫としての役割などをもつことから，筋肉量は QOL や生命予後に直結する。高齢化が進む現代社会において，骨格筋の可塑性が減衰することで発症する疾患である加齢性筋減弱症「サルコペニア」は非常に大きな問題であり，その機序の解明と予防法の確立が期待されている。

食物の不足や環境温低下といった過酷な冬期環境に対する生存戦略として，一部の哺乳類は冬眠をすることが知られている。驚くべきことに，約半年間もの身体不活動状態を経験するにも関わらず，冬眠動物の骨格筋量は冬眠前後でほとんど変化しない。一方で，冬眠していない活動期に筋肉の動きを制限すると，冬眠動物であっても骨格筋量は大きく減少することが知られている。つまり，冬眠動物は，冬眠期間中に誘導される何らかの生理学的応答によって筋肉が弱くなるのを防いでいると考えられる。

そこで，冬眠前後に大型の冬眠動物（ツキノワグマ）の筋肉を採取し，生化学・分子生物学的な手法を用いて，タンパク質や遺伝子の変動を解析した。その結果，筋タンパク質合成を促進する働きを持つ mTOR 経路が冬眠によって活性化されていること，筋量を負に制御するミオスタチン遺伝子の働きが抑制されていることが確認された。さらに，網羅的な解析を進めていくと，冬眠によって発現が有意に変動する遺伝子は 100 個以上も存在することが明らかとなった。もし冬眠中のクマの血液には筋萎縮を抑制する物質が含まれているならば，骨格筋培養細胞に添加した場合，細胞にはどのような変化が起こるのだろうか？　現時点では，冬眠中に骨格筋量を維持する仕組みはまだまだ不明な点が多いが，将来的にはヒトの寝たきり防止や新たなリハビリ手法の開発に繋がっていくことが期待される。

（文責　北岡祐）

5. 演　題：大西洋を渡る知識人たち ── 世紀転換期における「文化」論争について
講演者：貞廣真紀氏（明治学院大学文学部英文学科准教授）
開催日：2019 年 1 月 25 日
会　場：17 号館 216 室

今回の講演会では，世紀転換期に環大西洋批評空間で生じた「文化・教養」（culture）主義がアメリカ文学史の形成にどのように影響したかを考察する。移民の増加や国際流通ネットワークの形成によって多様な文化がアメリカに流入するなかで，アメリカの知識人たちは国民が共有すべき「文化」を規定し，文化階級の固定化を試みた。その風潮の中で文学史が編纂され，古典が聖別され，文学が学問として制度化されていくことになる。しかし，同時にそれは，アーノルド的な意味での「文化」に対する不満を引き起こす契機でもあった。講演では，1880 年代のマシュー・アーノルドやオスカー・ワイルドらのレクチャー・ツアーを出発点に，第一次大戦期にかけての英米の知識人の批評活動と交流を振り返り，環大西洋空間における文化意識の共有と対立がアメリカ古典文学を準備したそのダイナミズムを検証した。

（文責　古屋耕平）

購 入 文 献 解 題

『*Superman. The Golden Age Omnibus Vol. 5*』
　編著者：Jerry Siegel，様々な作者
　出版社：Detective Comics, Inc. New York/USA
　出版年月：2018 年 1 月

『*Superman. The Golden Age Omnibus Vol. 5*』には 1945 年から 1947 年までのスーパーマンのアドベンチャー『*Action Comics*』＃86–105，『*Superman*』＃34–43，そして『*World's Finest Comics*』＃19–25 が集められている。これらの初期の本質的なスーパーマンのストーリーは，第二次世界大戦後の彼の最初のアドベンチャーを示し戦争から平和へのアメリカ社会の移行を示している。暗くプロパガンダ的な戦時中のアドベンチャーの後で，これらのストーリーはより明るく，より面白い調子に変化した。“Mr. Mxyzptlk” や “Prankster” のようなクラシックな悪党，またおどけたピエロのような敵はこの初期の登場を特徴とする。アークエネミー “Lex Luthor” もまた明るいムードで登場するようになる。

（文責　ブッヘンベルゲル・ステファン）

所 員 自 著 紹 介

1. 永野善子（編著）『帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』
（神奈川大学人文学研究叢書 40）御茶の水書房，2018 年 3 月 20 日，xvi＋273 頁＋ii

本書は，複数の専門領域（国際関係論・歴史学・人類学・経済学・地域研究）を専門とする研究者たちが，アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験に照らしながら，帝国論とナショナリズム論に対して，近代国家形成，民族独立運動，脱植民地化過程，ナショナル・ヒストリー（国民史）の創出など，複数の個別の諸問題から接近した 3 年間の共同研究の成果である。本共同研究は，歴史的事実の積み重ねだけでなく，さまざまな地域で歴史がどのように語られてきたのか，つまり歴史についての語り（言説）に注目し，それ自体が現実の歴史にどのように影響してきたのかにも注目してきた点に特徴がある。本書には 9 篇の論文が収録されており，各章の論題と執筆者は以下のとおりである。

第 1 章「文学（者）による文化工作・建設戦：上田廣「黄塵」の意義」（松本和也）
第 2 章「サイパン戦秘史にみる人種差別とナショナリズム」（泉水英計）
第 3 章「香港における入境管理体制の形成過程（一九四七～五一）：中国・香港間の境界の生成と「広東人」」（村井寛志）
第 4 章「タイにおける王党派思想とナショナリズム」（山本博史）
第 5 章「分断される国家と声でつながるコミュニティ：タイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」（高城玲）
第 6 章「フィリピン革命史研究再訪：近年のフィリピンにおける研究潮流を背景として」（永野善子）
第 7 章「米国帝国下のフィリピン・ミンダナオ島開発とフィリピン人エリート：一九二〇年代のゴム農園計画を中心に」（鈴木伸隆）
第 8 章「キプシギス人の「ナショナリズム発見」：ケニア新憲法と自生的ステート＝ナショナリズムの創造」（小馬徹）
第 9 章「ボリビア「複数ネーション国家」の展望：アフロ系ボリビア人の事例から」（梅崎かほり）

（永野善子）

2. 深沢徹『新・新猿楽記 ── 古代都市平安京の都市表象史』
（神奈川大学人文学研究叢書 41）現代思潮新社，2018 年 3 月 30 日，346 頁

従来の文学史叙述が，「和歌」や「物語」，「随筆」や「連歌」などの〈和文〉を主体に構成されてきたのに対し，不当に軽視された〈漢文〉の，その重要性を示すことに，本書執筆の隠れた意図がある。〈漢文〉は近代以前には，そのときどきの文化を中心的に担い，日本語の発展にも大いに貢献してきた叙述形式である。なのに現在，中学高校の教育現場で教えられる文学史の内実は，大きく〈和文〉のテキストに偏っている。これは，明治近代国家の要請に応え，外来の文字である「漢字」を極力排して，自前の文字とされる「仮名」で書かれたテキストにばかり優先権を与えようとした結果である。ドイツロマン派あたりの流れをくむ，近代ナショナリズムの発想に基づいて，「〈国民＝民族〉国家」にふさわしい文学史叙述が，是非とも求められたからであった。

明治近代以降の，その偏りを是正すべく，副題に示したように，本書では，〈漢文〉で書かれた「記」の作品を通して，平安の中ごろから鎌倉のはじめにかけての，古代都市平安京の変容過程を跡づけた。〈漢文〉のテキスト形式の一つに「記」がある。比較的平易にコトを叙す，その「記」のテキスト形式を踏まえ，古代都市平安京の空間構成の変化に意を注いだものとして，慶滋保胤の『池亭記』があり，藤原明衡の『新猿楽記』があり，鴨長明の『方丈記』があった。それらテキストを時系列に並べることで，互いの継承関係を明らかにし，〈和文〉重視の従来の文学史とは違う，もうひとつ別の，オルターナティブな文学史を構想してみせた。その際に，作者の個人的経歴と係わらせるお定まりの分析手法を採らなかった。それらテキストを，本書では，住まいとしての「住居」，住まいとしての「都市」，住まいとしての「身体」，住まいとしての「現世」といったように，広く空間認識の遷移としてとらえ，意味づけしてみせた。建築家の磯崎新や，思想史の丸山眞男，さらには精神分析家のジャック・ラカンなどの所説を縦横の参照しつつ，従来の文学史叙述にとらわれることなく，個々のテキストを丹念に分析し，解説し，注釈し，翻訳し，つまりはさまざまにパラフレーズしてみせた。

結論として言えば，こういうことになる。鴨長明の『方丈記』は，〈隠者文学〉などという極めて近代的なジャンル区分に収まりきるやわなテキストでは，決してないのだということ，これである。

（深沢徹）

3. 小倉英敬『グローバル・サウスにおける「変革主体」像 「21 世紀型」社会運動の可能性』
揺籃社，2018 年 6 月 15 日，269 頁

本書は筆者が刊行中である『グローバル・ヒストリーとしての「植民地主義批判」』全 10 巻の第 2 巻である。新自由主義的なグローバル化の加速化に伴って，世紀転換期頃より 20 世紀型の「南北問題」の視角は有効性を失い，「グローバル・サウス」という旧「南北」双方におけるグローバル化の犠牲者あるいはその恩恵から排除された人々を表現する概念が使用されるようになってきた。その一方で，1990 年代半ば頃より世界的にも社会運動の質に変化が生じ，世紀転換期当初は「ネットワーク型」の社会運動が拡大し，その後 2010 年代からは「クラウド型」の社会運動が登場して，SNS を駆使して数十万人規模の街頭行動が実施されるようになってきた。本書は，このような現象の背景にある，資本主義システムの変化やそれに伴う「変革主体」の変容を「グローバル・サウス」の概念を軸に検証し，さらに世界的に拡大している代表制民主主義の形骸化や「政治の劣化」を克服してゆく，新しい方向性を考察することを目的としている。

（小倉英敬）